

# 養護教諭志望学生初年次における 保健室見学実習の有効性の検討

—実習事前事後の自己評価表の分析から—

湯原 裕子\*<sup>1</sup> 小林 芳枝\*<sup>2</sup> 進藤 浩子\*<sup>3</sup>

## Study of the Effects in the Health room observation practical training in the First Year of the Student who wants to become a School Nurse — Analysis of self-assessment pre-post Practical Training —

*YUHARA, Hiroko, KOBAYASHI, Yoshie and SHINDO, Hiroko*

### 要旨

本研究の目的は、保健室見学実習に参加した養護教諭志望初年次の学生が記述した事前事後の評価表を分析することを通して、実習の有効性を明らかにすることである。事前事後の自己評価の平均値を検定した結果、「子どもへの基本的な対応」等の項目において事後の方が有意に高い結果だった。また実習事後の「反省及び感想」を分析した結果、【子ども理解】【養護教諭の職務と保健室の機能の理解】【大学での学びの深まり】【養護教諭の志向性と学習意欲の向上】【自分の課題への気づきと実習の限界】の5つのコアカテゴリーにまとめられ、学生の学びや気づきは多岐にわたっていた。適性や志向性に揺らぎを感じ始めた学生にとって、早期に保健室経営や養護教諭の活動を観察することは、養護教諭になりたい意欲の喚起と学習への動機づけになることが示唆された。また1日の見学では観察できる活動や内容に限界があることが明らかになった。

### キーワード

保健室見学実習, 養護教諭, 初年次, 自己評価

### Abstract

This study aimed to clarify the effectiveness of practical training through the analysis of assessment sheets completed by first-year students aspiring to be school nurses before and after their participation in practical training involving a visit to a nurse's office. Testing of the average scores for self-assessments completed before and after training revealed significantly higher scores for items "basic treatment for children" after training. Furthermore, analysis of "reflection and impressions" after practical training revealed grouping into five core categories: "understanding children," "understanding the job of school nurses and the functions of the nurse's office," "deepening one's learning at university," "improving the intentions and willingness to be school nurse," and "the challenges and limitations of practical training involving a visit to a nurse's office." This showed that students' learning and realizations were diverse. These findings suggest that observing the management of school infirmaries and the activities of school nurses at an early stage of their studies motivated students, who were beginning to experience fluctuations in their aptitude and intentions, to learn and to become school nurses. This study also revealed limitations in the activities and content that students could observe during their one-day visit to a nurse's office.

### Key words

practical training involving a visit to a nurse's office, School Nurse, First Year of the Student, self-assessment

### はじめに

現在、戦後に始まる教員養成は開放性の原則により、多様な養成機関が存在しており、養護教諭養成においても、教育学系、保健医療系、学際系など多岐にわたっている。養護教諭養成は多様な学問体系を基盤とした大学や短期大学がそれぞれの特徴や強みを活かして教育を行い、多様な専門性をもった養護教諭を輩出している。近年の子どもの心身の健康課題が多様化・複

雑化していることから、免許法に従って単に科目を取得するだけでなく、社会の変化や子どもの諸課題に的確に対応できる資質・能力、教育実践力をもつ養護教諭を養成することが求められている。卒業時に到達すべき最低限必要な資質・能力を可視化し、それぞれの養成機関が必要な資質・能力を担保する教育を検討するために、全国養護教諭養成大学協議会において「養護教諭養成課程コアカリキュラム2020」<sup>1)</sup>が開発され、今後の

\*1：聖徳大学心理・福祉学部社会福祉学科・講師／\*2：聖徳大学心理・福祉学部社会福祉学科・教授／

\*3：聖徳大学心理・福祉学部社会福祉学科・講師

活用が期待されているところである。本研究の対象校であるA大学は社会福祉系であり、養護教諭専門科目の他に、卒業必修科目として社会福祉に関する科目を履修している。虐待や貧困など、複雑化・多様化する子どもの現代的な健康課題に対して、福祉の視点をもって地域社会とのつながりの中で子どもを理解し、社会的資源を活用して子どもを支援できる養護教諭を養成することを目指している。在学中は社会福祉に関して深い学びが得られ、社会福祉士や精神保健福祉士、保育士の同時取得も可能であり、卒業後の職業選択の幅が広がる。一方、資格の複数取得を目指すことで必要な履修科目が多くなり、養護教諭の専門教育科目に費やす学習時間が減少し、目標とする学習成果が達成されないという課題もはらんでいる。

A大学に入学する学生の多くは、小学校から高等学校まで、保健室や養護教諭との間に肯定的かつ好意的な体験を持っており、また理想の養護教諭像を描いているものも少なくない。初年次から養護教諭専門科目として「学校保健」と「養護概説」を学び、さらに医学、小児看護学といった養護教諭の職務の基盤となる広域な学問領域を学ぶ。しかし専門領域を学ぶうちに、思い描いていた以上に養護教諭の職務が多様で専門性が高く責任が重いと感じ、さらに教員採用試験の倍率が高いことから、初年次の後半には、自分の力量では養護教諭にはなれないのではないか、また複数の資格が取得できることから、自分には養護教諭は向いていないのではないか、他の職業の方がよいのではないかといった気持ちの揺らぎが起こる学生も少なくない。

B大学の教育学部養護教諭養成課程の学生に行った在学中の志向の変容に関する研究<sup>2)</sup>では、専門科目や実習によって「養護教諭より他の職種等に魅力を感じた」、「自分を過小評価し自信がなくなった」等の揺らぎが生じ、養護教諭の志向にマイナスに作用したことを報告した。また、C大学の教育学部養護教諭養成課程4年生に実施した養護教諭志向に関する意識変容プロセスに関する研究<sup>3)</sup>では、学びを進めるうちに理想とする養護教諭と自分の適正や実力とのギャップを感じ不安や悩みが生じたことを報告した。一方で揺らぎの時期から養護教諭の志向を高める事柄としては、「学校現場で理想の養護教諭と出会った」、「子どもと関わることでもっと関わりたいと思った」等のボランティアや養護実習での経験によるものであることを明らかにした。実践的指導力の基礎の育成に有効である学校インターンシップの成果としても、「教職に就きたい気持ちの向上」、「関連授業に対する意欲の向上」が報告され<sup>4)</sup>、「自分自身の課題への気づき」、「今後さらに学びを深めることへの決意」につながったとの報告もある<sup>5)</sup>。いずれの場合も学校現場での体験が、教職や養護教諭への志向を高め、自分の課題に気づき、その後の大学での学習意欲向上につながっていることは明らかである。

A大学では教員免許を取得するための課程登録は2年次の春学期に行うことになっている。しかし、養護教諭コースに入学

した学生全員が養護教諭免許状取得に向けた課程を登録していない。3年次で実施する養護実習やその前後の学校インターンシップ、学校現場でのボランティア等を体験し、養護教諭としての適性や課題を改めて考える前に、養護教諭を目指す気持ちが薄らいでくる学生が少なくない。この現状の改善を図るためA大学では、初年次の秋学期終了時に保健室経営の様子や養護教諭の活動を1日を通して観察する保健室見学実習を行っている。大学の初年次教育の1つとして「学問や大学教育全般に対する動機付け」が重要視されており<sup>6)</sup>、初年次に、その後の学習への動機づけにつながる体験活動を取り入れることは非常に意義があると考えられる。初年次に保健室見学実習を取り入れ、その効果を検証したD大学養護教諭養成課程の研究<sup>7)</sup>によると、初年次春学期の90分の見学時間ではあるが、一時的でも養護教諭の立場で保健室を観察する体験によって、養護教諭の職務をイメージしやすくなり、今後の学習意欲を高めることに役立ったと報告している。またE大学の自己開拓による保健室見学実習の報告<sup>8)</sup>によると、概ね1人あたり2時間の訪問ではあるが、養護教諭の職務の多さを感じつつも、学校における存在の大切さ、やりがいを感じ、医療知識や心理学の学習など自己研鑽の必要性を見出したことを報告している。しかしながらA大学のように1日を通した見学実習を実施し、その有効性を報告した研究は未だ見当たらない。A大学での取り組みも養護教諭への志向性の向上や学習への意欲喚起につながるものが想定されるが、初年次秋学期の1日を通した見学であるため、専門職としてより多くの学びや効果を得られているものと考えられる。

A大学での保健室見学実習の取り組みは2017年度から行ってきた。本稿では、2022年度に保健室見学実習に参加した養護教諭志望の初年次の学生が記述した事前と事後の評価表を分析することを通して、1日の保健室見学実習の有効性を検討する。本研究は養護教諭養成課程での初年次教育における体験学習の意義と有効な取り組みに関する提起になると考える。

## 方法

### 1 保健室見学実習の概要

#### 1) 目標

本実習は、養護教諭の職務への理解を深め、3年次に実施する養護（臨地）実習につながるものとして、「1日の養護教諭の活動を見学し、大学での学びと実際の教育活動との統合を図る」、「養護教諭になりたい意欲を高め、理想とする養護教諭像を描き、問題意識を持って大学の授業に臨むことができるようにする」の2点の目標を掲げている。

#### 2) 実習時期と配属

本学では初年次春学期から、「学校保健I」「健康科学」等の養護教諭専門科目を履修し、秋学期には「養護概説」を履修す

る。実習は秋学期終了後の2月に設定している。4～5名のグループを編成し、本学の附属学校保健室にて実習を行った。なお附属学校は3校あり、小学校1校、中学校高等学校2校それぞれに配属している。養護教諭の配置は中学校高等学校2校のうち1校は単数配置、他2校は複数配置である。

### 3) 実習の記録

実習では、観察や質問をし記録用紙に記録する。この記録は後に教員に提出することになっている。記録の内容は主に、子どもへの基本的対応と保健室経営、保健室内の配置図、健康観察、救急処置・救急体制、教職員連携、保健事務である。

## 2 分析対象

分析対象とするのは、保健室見学実習に参加した学生が記述した事前と事後の自己評価である。2022年度保健室見学実習の対象者は60名であるが、分析対象は事前・事後の自己評価の両方を提出した58名分である。なお58名から同意を得られた。

## 3 自己評価表の内容

保健室見学実習に参加する前に、「保健室の機能」、「保健室経営」、「健康観察」、「子どもへの基本的な対応」、「教職員との連携」の理解について、4件法（1：全く知ることができなかった、2：あまり知ることができなかった、3：やや知ることができた、4：とてもよく知ることができた）を用いて自己評価した。また「養護教諭になりたいという意欲」についても、4件法（1：全く意欲が高まらなかった、2：あまり意欲が高まらなかった、3：やや意欲が高まった、4：とても意欲が高まった）を用いて自己評価した。保健室見学実習に参加した後は、事前の項目と同様の内容について4件法を用いて評価し、さらに「反省及び感想」を自由に記述した。事前評価は2023年1月13日実習オリエンテーションの際に実施し、事後評価は保健室見学実習参加後2週間以内に実施するよう指示をした。

## 4 分析方法

事前評価、事後評価のそれぞれ6項目について、1を1点、2を2点、3を3点、4を4点として得点化した。さらにそれぞれの平均値を求め、事前と事後の値を比較した。分析は

SPSS Statistics ver.25にて対応のあるt検定を行い、統計学的有意水準は5%未満とした。

「反省及び感想」の自由記述に関しては質的記述的分析法を用いて分析した。まず文章ごとに切片化し、意味内容を損ねないようにコード化した。コードを類似性で分類し、サブカテゴリー、カテゴリー、コアカテゴリーにまとめラベルをつけた。それぞれの分析過程においては、信頼性・妥当性を高めるために、共同研究者間で5回協議し同意を得ながら分析を進めた。

## 5 倫理的配慮

本研究を行うにあたっては、対象となる養護教諭コース初年次の学生に対して、保健室見学実習事前オリエンテーションの際に、研究同意説明書を用いて研究の目的、方法等を説明し、自己評価表の研究への利用について文書で同意を得た。自己評価表の提出は、本実習が授業の一環であることから学生全員が対象となるが、研究使用に関しては同意した学生の評価表のみを対象とすること、評価表は匿名化して分析することを説明した。また記述内容や研究に協力しないことが、成績評価に影響する等の不利益がないことを説明するとともに、同意文書の提出の際には、2週間程度の期間を確保して、未提出の学生がいても教員から確認したり催促したりしないことにより、研究に協力したくない学生に圧力がかからないようにした。なお本研究は、聖徳大学ヒューマンスタディに関する倫理委員会（No. R03U049）の承認を得て実施している。

## 結果

### 1 実習事前と事後の評価

実習の事前と事後の自己評価の平均値、標準偏差は表1の通りである。平均値の差について検定を行った結果、「子どもへの基本的な対応」等の項目において有意な差が認められた。

### 2 反省及び感想

事後評価の「反省及び感想」について分析した結果、総コード数は470であり、意味内容の類似性によって分類し、56のサブカテゴリー、さらに抽象度を上げて15のカテゴリー、5のコード

表1 実習事前事後の評価比較

N=58

	事前		事後		増減値	P値		自由度
	平均	±SD	平均	±SD				
保健室の機能	3.45	0.32	3.77	0.31	0.32	0.000	***	57
保健室経営	3.21	0.35	3.52	0.39	0.31	0.000	***	57
健康観察	3.57	0.28	3.63	0.27	0.06	0.471		57
子どもへの基本的な対応	3.39	0.31	3.88	0.11	0.49	0.000	***	57
教職員との連携	3.32	0.36	3.71	0.21	0.39	0.000	***	57
養護教諭になりたいという意欲	3.14	0.59	3.39	0.49	0.25	0.005	**	57

\* $p < 0.05$  \*\* $p < 0.01$  \*\*\* $p < 0.001$



表2 実習事後の反省及び感想：子ども理解

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	コード(一例)
子ども理解(27)	子どもの実態や存在の理解(27)	保健室に来室する子どもの背景や実態が分かった(23)	自分の症状をきちんと言える子ばかりではない・様々な症状や不安・悩みを抱えた生徒が保健室に来室した
		子どもという存在を知った(4)	生徒は自分で決めたことは頑張ることができるのだと実感した・小学生は繊細だと思った

アカテゴリーにまとめた。以下、コアカテゴリーを【】、カテゴリーを<>、サブカテゴリーを〔〕、コードを“”として説明する。

### 1) 子ども理解に関すること

表2に示したように、コアカテゴリー【子ども理解】は総コード数27、サブカテゴリー2、カテゴリーは<子どもの実態や存在の理解>で構成された。学生は“自分の症状をきちんと言える子ばかりではない”のように、保健室に1日入室し〔保健室に来室する子どもの背景や実態が分かった〕と述べていた。また学生は“生徒は自分で決めたことは頑張ることができるのだと実感した”や“小学生は繊細だと思った”と述べ、〔子どもという存在を知った〕と子ども観を深める経験をしていた。

### 2) 養護教諭の職務と保健室の機能の理解に関すること

表3に示したように、コアカテゴリー【養護教諭の職務と保健室の機能の理解】は総コード数274、サブカテゴリー34、カテゴリーは<養護教諭の職務内容の理解><子どもへの基本的対応の理解><保健室の機能と環境整備の理解><連携の必要性と方法の理解>等の7つで構成された。

<養護教諭の職務内容の理解>は〔実際に見学することによって新しい気づきがあった〕〔職務が幅広く多様であることを改めて実感した〕等の8つのサブカテゴリーに整理された。学生は“自分が利用していた時には気づけない工夫に気づくことができた”と述べており、実際の保健室で養護教諭の立場になって見学できたことで新しい気づきを得られていた。さらに学生は“朝礼から放課後まで学校にいて見えてくるものがあった”のように、〔養護教諭の1日の流れを理解することができた〕と述べていた。また“養護教諭は見えないところで沢山の仕事をこなしていることを学んだ”と述べており、子ども時代には見ることはできなかった来室時以外の養護教諭の仕事の幅広さや多様さを改めて実感していた。養護教諭の仕事として、“仕事が多く忙しくてもその時期に適した掲示物を制作しすごいと思った”のように掲示物の観察から学んだり、“来室カードは情報を他の教員に伝えるために必要な工夫だと感じた”や“児童生徒から個人情報が見えないような位置でパソコンやタブレットを開いていた”のように、保健室の記録の活用や取り扱い上の留意事項を学んだりしていた。さらに“発熱者が利用した後のベッドを丁寧に消毒していた”や“学習や宿泊に向けてアレルギー管理指導表を確認しておく必要があると分かった”と述べており、養護教諭の仕事として、感染症対策や

アレルギー対応などの保健管理について学んでいた。

<子どもへの基本的対応の理解>は〔子どもを理解するために観察やアセスメントが大切だと分かった〕〔養護教諭が行う教育的対応が分かった〕〔子どもとのコミュニケーションの取り方を学んだ〕等の5つのサブカテゴリーに整理された。学生は“症状の判断については入室時の状態だけではなく、日頃の生活状況を知っておくことが重要であると理解した”と述べており、子どもを理解するためには日頃の観察とアセスメントが大切であることを学んでいた。また“自分で考えさせて、自分で行動することで自己管理能力が育まれるのだと分かった”と述べており、養護教諭の対応から教育的機能を学んでいた。さらに“児童の話に傾聴し、一方的ではなくきちんと対話をしていく中で信頼関係も築くことができると感じた”と述べており、子どもと信頼関係を築くためのコミュニケーションの取り方を学んでいた。また子どもに対する養護教諭の普段の対応として“頭部打撲の子どもに迎えが来るまでの養護教諭の対応を見ることができて良かった”のように重症度の判断や応急処置の流れ、休養時の工夫を学んでいた。

<保健室の機能と環境整備の理解>は〔緊急時に備えた環境整備と工夫を知った〕〔子どもが利用しやすい保健室の配置や工夫を理解した〕〔他の教職員にも分かりやすい保健室備品の整理を学んだ〕等の7つのサブカテゴリーに整理された。学生は“AEDの設置場所やエビペンの置き場所を全教員に周知し緊急事態に備えて準備しておくことが大切だと感じた”や“他の先生が保健室を利用する場合にどこに何があるか分かりやすいように保健室の物や棚にラベルが貼られていた”と述べており、緊急時や養護教諭の不在時に備えて全教職員が保健室の設備や備品が使用できるように事前に準備していることを学んでいた。さらに“保健室は動線が確立され、緊急対応や生徒とのコミュニケーションが取りやすい場であった”や“刃物が児童生徒から見えないような場所にしまうといった細かいことにも気を使っている”と述べており、保健室内は子どもが安心して利用できるように動線や配置が工夫され、安全にも気が配られていることを学んでいた。さらに“保健室はけがの手当てや体調不良者が利用するだけでなく、心のケアも行える場所であることを再確認した”のように、保健室が子どもや学校にとってどのような場所であるか理解していた。

<連携の必要性と方法の理解>は〔教職員と連携を取り合う場面を見学できた〕〔日頃から教職員とコミュニケーションを

とることが大事であると知った〕〔子どもに対応するために連携が必要だと学んだ〕〔複数配置の良さを知った〕等の8つのサブカテゴリーに整理された。学生は“実際に他の教職員の方と養護教諭が連絡を取り合っている姿をみて非常に勉強になった”や“日頃から他教員とコミュニケーションを図っていることで健康相談の際に状況把握がスムーズだった”と述べている

ように、養護教諭と教職員の具体的な連携の方法や情報共有の重要性を学んでいた。“日頃から連携を意識し、解決策、配慮を話し合っていることがわかった”のように子どもによりよい対応をするためには連携が必要であることを学んでいた。さらに複数配置の養護教諭との連携、保護者、SCや学校薬剤師との連携についても直接観察することによって、連携が具体的に

表3 実習事後の反省及び感想：養護教諭の職務と保健室の機能の理解

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	コード(一例)		
養護教諭の職務内容の理解(81)		実際に見学することによって新しい気づきがあった(22)	自分が利用していた時には気づけない工夫に気づくことができた・保健室を養護教諭の立場で見学してみると、普段は気づくことのなかった工夫に気づけるようになった		
		職務が幅広く多様であることを改めて実感した(18)	養護教諭は見えないところで沢山の仕事をこなしていることを学んだ・目に見える仕事だけでなく影の仕事が多いと改めて実感した		
		養護教諭の対応を間近に見ることができた(11)	自分の目で見ることができ、養護教諭の理解が深まった・養護教諭の実際の仕事内容を間近で見ることができとても勉強になった		
		養護教諭の1日の流れを理解することができた(8)	養護教諭として働く1日の流れをしっかりと理解することができた・朝礼から放課後まで学校にいて見えてくるものがあった		
		掲示物を観察し工夫を知った(6)	仕事が多く忙しくてもその時期に適した掲示物を制作しすごいと思った		
		記録の活用と留意事項を知った(6)	入室カードは情報を他の教員に伝えるために必要な工夫だと感じた・児童生徒から個人情報が見えないような位置でパソコンやタブレットを開いていた		
		感染症対策を学んだ(5)	発熱者が利用した後のベッドを丁寧に消毒していた		
		アレルギー対応を学んだ(5)	学習や宿泊に向けてアレルギー管理指導表を確認しておく必要があると分かった		
		子どもへの基本的対応の理解(55)		子どもを理解するために観察やアセスメントが大切だと分かった(17)	症状の判断については入室時の状態だけではなく、日頃の生活状況を知っておくことが重要であると理解した
				養護教諭が行う教育的対応が分かった(17)	自分で考えさせて、自分で行動することで自己管理能力が育まれるのだと分かった
				子どもとのコミュニケーションの取り方を学んだ(9)	児童の話に傾聴し、一方的ではなくきちんと対話をしていく中で信頼関係も築くことができると感じた
				普段の応急手当の流れを見学できた(7)	様々な理由で入室する生徒に素早く適切に対応し、かつ保健教育もきちんと実施していた
		保健室の機能と環境整備の理解(51)		保健室で休養させる際の工夫を知った(5)	担架や車いすは保健室の外に設置されていて休んでいる生徒への配慮があった
				緊急時に備えた環境整備と工夫を知った(13)	AEDや担架が緊急時にすぐ使えるように配置が工夫されていた
子どもが利用しやすい保健室の配置や工夫を理解した(9)	保健室は動線が確立され、緊急対応や生徒とのコミュニケーションが取りやすい場であった				
他の教職員にも分かりやすい保健室備品の整理を学んだ(9)	他の先生が保健室を利用する場合どこに何があるか分かりやすいように保健室の物や棚にラベルが貼られていた				
保健室内の配置の意味を理解した(8)	保健室で休んでいる生徒全員を見られる位置に机が設置されていた				
保健室の機能を理解できた(7)	保健室はけがの手当てや体調不良者が利用するだけでなく、心のケアも行える場所であることを再確認した				
安全に配慮した保健室経営を知った(3)	刃物が児童生徒から見えないような場所にしまうといった細かいことにも気を使っている				
連携の必要性と方法の理解(42)		校内の保健室の位置を観察した(2)	救急車が入れるところに保健室が設置されていた		
		教職員と連携を取り合う場面を見学できた(13)	実際に他の教職員の方と養護教諭が連絡を取り合っている姿をみて非常に勉強になった		
		日頃から教職員とコミュニケーションをとることが大事であると知った(8)	先生方との連携では雑談を通して情報を収集することも大事であると知った		
		子どもに対応するために連携が必要だと学んだ(6)	日頃から連携を意識し、解決策、配慮を話し合っていることがわかった		
		複数配置の良さを知った(6)	けがの度合いを判断する際に複数配置だと正確にできるのでよいと思った		
		保護者との連携を見学した(4)	素早く対処するには親との情報共有も必要な事だと感じた		
		担任へのアドバイスが大切だと学んだ(2)	対応が分からない先生には、何をすればいいか教えることが必要なのことがわかった		
		SCとの関わり方を学んだ(2)	担任やカウンセラーとの連携を間近で見ることができた		
子どもに向き合う姿勢や能力(35)		薬剤師への相談場面を見学できた(1)	修学旅行にどんな薬を持っていけばいいか学校薬剤師に相談していた		
		子どもに回答する優しさや明るさの態度が大切であると思った(17)	子どもが入室した時には作業中ですがすぐに子どもを優先していた		
		一人ひとりに合った対応が大切であると学んだ(13)	対処の方法は生徒一人ひとり違っていることを改めて感じる事ができた		
養護教諭の多忙さと大変さ(6)		養護教諭に必要な力を学んだ(5)	養護教諭にはコミュニケーション力が大切であることを学んだ		
		養護教諭は多忙だと思った(4)	養護教諭はとても忙しいそう		
養護教諭の存在理解(4)		養護教諭は大変だと思った(2)	養護教諭の凄さ、大変さを改めて実感した		
		子どもや教職員にとって養護教諭がどんな存在かを知った(4)	養護教諭は、児童生徒だけでなく教職員や児童生徒の保護者の方にも頼りにされているということが実感できた		

表4 実習事後の反省及び感想：大学での学びの深まり

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	コード(一例)
大学での学びの深まり(29)	積極的な参加による大学の学びと実際の教育活動との統合(29)	養護教諭になったことを想像して考えた(12)	自分だったらどう関わっていくのかどう声をかけるべきなのか、沢山考えることができた
		大学での学びが具体化され理解が深まった(11)	目の前で見学することができたため、大学の授業内で学んだことを思い出しながら、理解を深めることができた
		積極的に行動し質問できた(6)	気になることや疑問を積極的に質問ができた

どのように行われているかを見て学ぶことができていた。

＜子どもに向き合う姿勢や能力＞は〔子どもに応答する優しさや明るさの態度が大切であると思った〕〔一人ひとりに合った対応が大切であると学んだ〕〔養護教諭に必要な力を学んだ〕の3つのサブカテゴリーに整理された。“忙しくても常に優しく、丁寧に対応をすることは一見簡単そうで実際はとても大変だと思った”と述べていた。また“同じ理由で入室した生徒でも性格やこれまでの経験を基に一人ひとりに合わせた対応をしてくれている”と述べており、養護教諭が子どもの状態を読み取り、一人ひとりのニーズに合わせた対応を親身に行っている様子をすごいと感じつつ、大変さも同時に感じていた。

＜養護教諭の多忙さと大変さ＞は〔養護教諭は多忙だと思った〕〔養護教諭は大変だと思った〕の2つのサブカテゴリーに整理された。“養護教諭はとても忙しそう”、“養護教諭の凄さ、大変さを改めて実感した”と述べており、学生は養護教諭の多忙さを目の当たりにし改めて凄さや大変さを実感していた。

＜養護教諭の存在理解＞は〔子どもや教職員にとって養護教諭がどんな存在かを知った〕の1つのサブカテゴリーに整理された。“養護教諭は、児童生徒だけでなく教職員や児童生徒の保護者の方にも頼りにされているということが実感できた”と述べ、学校で養護教諭がどんな存在であるか理解していた。

### 3) 大学での学びの深まりに関すること

表4に示したように、コアカテゴリー【大学での学びの深まり】は総コード数29、サブカテゴリー3、カテゴリーは＜積極的な参加による大学の学びと実際の教育活動との統合＞の1つで構成された。

＜積極的な参加による大学の学びと実際の教育活動との統合＞

は〔養護教諭になったことを想像して考えた〕〔大学での学びが具体化され理解が深まった〕〔積極的に行動し質問できた〕の3つのサブカテゴリーに整理された。学生は“自分だったらどう関わっていくのかどう声をかけるべきなのか、沢山考えることができた”や“私だったらこういう対応するなと考えながら見学することができた”と述べており、将来自分が養護教諭になることを想定し、養護教諭としてどのように対応すべきか考えながら見学することができていた。また“目の前で見学することができたため、授業内で学んだことを思い出しながら、理解を深めることができた”と述べていた。学生は、養護教諭の職務として1年間机上で学んだ内容と現場で展開されている実践を結びつけて具体化し、大学での学びを深めていた。さらに“気になることや疑問を積極的に質問ができた”のように積極的な姿勢で実習に参加し、学びを深める行動をしていた。

### 4) 養護教諭の志向性と学習意欲の向上に関すること

表5に示したように、コアカテゴリー【養護教諭の志向性と学習意欲の向上】は総コード数87、サブカテゴリー7、カテゴリーは＜養護教諭の志向性と学習意欲の向上＞＜理想の養護教諭像を描く＞＜1年次実習の良さ＞の3つで構成された。

＜養護教諭の志向性と学習意欲の向上＞は〔養護教諭になるための学習を頑張りたいと思った〕〔養護教諭になりたい気持ちが高まった〕等の4つのサブカテゴリーに整理された。“養護教諭になりたいという思いがさらに強くなった”と述べており、養護教諭への志向性の高まりがみられた。また“今後は具体的な理想像を思い描きながら学習を進めていきたい”と述べているように学習意欲の向上もみられた。さらに“保健室見学で得た知識と思いをこれからの学習や実習に活かしていきたい

表5 実習事後の反省及び感想：養護教諭の志向性と学習意欲の向上

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	コード(一例)
養護教諭の志向性と学習意欲の向上(87)	養護教諭の志向性と学習意欲の向上(63)	養護教諭になるための学習を頑張りたいと思った(22)	今後は具体的な理想像を思い描きながら学習を進めていきたい
		養護教諭になりたい気持ちが高まった(21)	モチベーションに繋がった・自分の目標を叶えたいと思った
		実習の経験を自分の今後につなげたい(10)	保健室見学で得た知識と思いをこれからの学習や実習に活かしていきたい
		養護実習に活かしたいと思った(10)	見学や質問だけでは分からない点は3年次の実習のために計画を立てていきたい
	理想の養護教諭像を描く(16)	なりたいた養護教諭像をイメージできた(9)	子どもの支えになり信頼される養護教諭になりたい
		養護教諭への憧れが強くなる(7)	生徒一人一人に合った対応をしている所を自分の目で見てやっぱり養護教諭の仕事っていいなと感じた
	1年次実習の良さ(8)	1年次に実習ができて良かった(8)	1年生の時から実習に行くことで養護教諭としての意識が高まった



表6 実習事後の反省及び感想：自分の課題への気づきと実習の限界

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	コード(一例)
自分の課題への気づきと実習の限界(53)	養護教諭としての力量不足への気づきと不安(25)	養護教諭としての力量が不足していると実感した(11)	自分には洞察力や課題発見力が不足していると感じた・自分の知識不足を実感した
		職務上の困難さに気づいた(7)	自分の考えだけに固執せず広く物事を考えて生徒と接する事の難しさを知った・児童の立場に立って物事を考え話すということの難しさを改めて痛感した
		自分に務まるだろうかと不安になる(7)	私に務まるのだろうかと不安に思う部分もあった・養護教諭の対応を生で見て自分にできるのか不安に感じた
	実習態度の反省(20)	自分から学ぶ姿勢が少なく反省した(6)	自分から学びを得ようとする姿勢ができていなかったと反省した
		質問をできないことを反省した(6)	現役の養護教諭の方が目の前にいるのにも関わらず、具体的な質問をすることができなかった
		事前準備が足りず反省した(3)	実習にいく前の段階で多くの質問を準備していけばよかったと感じた
		挨拶ができないことを反省した(3)	挨拶を曖昧にしてしまった
		初めての实習で緊張した(2)	初めての实習でとても緊張した
	1日の見学実習の限界(8)	1日の実習ですべてを学ぶことはできない(6)	希望の校種の実習に行きたかった・1日だけだったので、養護教諭の仕事の全てを学ぶことはできなかった
		養護教諭になりたい気持ちが低下した(2)	少し養護教諭になりたいと思う気持ちが薄れた

い”のように、1日の見学実習の成果を大学での学習や養護実習に活かしていこうとする姿勢がみられた。

＜理想の養護教諭像を描く＞は〔なりたい養護教諭像をイメージできた〕〔養護教諭への憧れが強くなる〕の2つのサブカテゴリーに整理された。“子どもの支えになり信頼される養護教諭になりたい”と述べており、見学実習は学生にとって理想の養護教諭像を描く機会になっていた。

＜1年次実習の良さ＞は〔1年次に実習ができて良かった〕の1つのサブカテゴリーに整理された。“1年生の時から実習に行くことで養護教諭としての意識が高まった”や“細かい目標も立てることができた”のように、1年次で実習に参加できたことの良さを述べていた。

##### 5) 自分の課題への気づきと実習の限界に関すること

表6に示したように、コアカテゴリー【自分の課題への気づきと実習の限界】は総コード数53、サブカテゴリー10、カテゴリーは＜養護教諭としての力量不足への気づきと不安＞＜実習態度の反省＞＜1日の見学実習の限界＞の3つで構成された。

＜養護教諭としての力量不足への気づきと不安＞は〔養護教諭としての力量が不足していると実感した〕〔職務上の困難さに気づいた〕〔自分に務まるだろうかと不安になる〕の3つのサブカテゴリーに整理された。学生は“自分には洞察力や課題発見力が不足していると感じた”のように、養護教諭の実践を目の当たりにしたことで自分の力量不足を認識するとともに、養護教諭の職務上の困難さを挙げ不安を募らせる様子が窺えた。

＜実習態度の反省＞は〔自分から学ぶ姿勢が少なく反省した〕〔質問をできないことを反省した〕〔事前準備が足りず反省した〕等の5つのサブカテゴリーに整理された。学生は“現役の養護教諭の方が目の前にいるのにも関わらず、具体的な質問をすることができなかった”と述べており、実習に対して事前に十分準備し積極的な態度で参加できなかったことを反省していた。

＜1日の見学実習の限界＞は〔1日の実習ですべてを学ぶこ

とはできない〕〔養護教諭になりたい気持ちが低下した〕の2つのサブカテゴリーに整理された。“希望の校種の実習に行きたかった”や“1日だけだったので、養護教諭の仕事の全てを学ぶことはできなかった”と述べており、さらに“少し養護教諭になりたいと思う気持ちが薄れた”という学生もいた。見学実習が1日であることから、配属校種や見学の内容、意識の向上には限界があることが課題として認識されていた。

## 考察

### 1) 初年次における保健室見学実習での学び

保健室見学実習の事前と事後の自己評価を分析した結果、「健康観察」以外の項目において有意な差が認められた。「健康観察」は事前評価の平均値が最も高い3.57であり、実習後に増加したものの、その変化は0.06であった。「健康観察」は小学生の頃から教育活動に組み込まれ、学生にとってイメージしやすい学校保健活動といえる。さらに専門科目での授業を通して、経験と理論が統合され、実習に参加する前から理解度が高かったと推測される。他の項目は、自身の経験や大学での学びだけではイメージしにくかった職務が、実際の現場を見学したことによって具体化され、実習後に理解度が高まったと考えられる。

また実習事後の評価表に記述した「反省及び感想」を分析した結果、【子ども理解】【養護教諭の職務と保健室の機能の理解】【大学での学びの深まり】【養護教諭の志向性と学習意欲の向上】【自分の課題への気づきと実習の限界】の5つのコアカテゴリーにまとめられ、学生の学びや気づきは多岐にわたっていた。

本実習の実習方法は、観察が中心であり、養護実習のように、大学で学んだ理論を基盤に、学生自身が教育活動に参加したり、自ら主体的に子どもに関わり実践したりすることは少ない。しかしながら、多岐にわたる学びが得られた要因としては、実習に参加する学生がすでに初年春学期から専門科目を履修し始めており、養護教諭の職務内容が広範にわたること、学ぶべきこ

と自体が多くあることを自覚し実習に臨んでいるからではないかと推察する。特に自己評価の平均値が事前と事後で最も増加した「子どもへの基本的な対応」では、〔子どもを理解するために観察やアセスメントが大切だと分かった〕〔養護教諭が行う教育的対応が分かった〕という旨の感想が述べられており、理論では理解しにくい職務が実践と統合され具体化されたことによって理解が深まったと推察される。また「教職員との連携」では、連携の重要性は授業でもたびたび取り上げているが、関係性を築くための養護教諭からの日常的な働きかけは、授業では伝えきれない<sup>9)</sup>ため、日常のコミュニケーションや情報共有など実際の連携場面を観察したことにより、＜連携の必要性と方法の理解＞が深まったと推察される。さらに、本実習では学生が観察をしながら記録するための用紙がある。実習方法としての『観察』については、子どもや教職員の活動を、問題意識をもってじっくりと注意深くみること<sup>10)</sup>と示されている。初年次の学生が注意深く観察するために、観察の留意点を事前に示し、観察したことを記録する用紙を活用したことも、多くの学びを得られたことにつながったと推察する。

## 2) 意欲の喚起と学習の動機づけ

大学の初年次教育として、学習意欲や目的意識を向上させるための方策を積極的に取り入れることが挙げられている<sup>6)</sup>。本研究では、自己評価項目の「養護教諭になりたいという意欲」が実習後に向上しており、また学生の記述でも＜養護教諭の志向性と学習意欲の向上＞が多く挙げられた。早い段階で養護教諭の活動を観察することは、自らの課題を発見して、その後の大学での学びの方向を探ることができる<sup>11)</sup>ことから、初年次において、保健室経営の様子や養護教諭の活動を観察できる機会があることは、適性や志向性に揺らぎを感じ始めた学生にとって、養護教諭を目指そうとする意欲を喚起し、今後の学習への動機づけにつながる可能性があることが示唆される。また理想の養護教諭との出会いが志向性を高めるという報告<sup>3)</sup>もあり、＜子どもに向き合う姿勢や能力＞を理解し、その姿がロールモデルとなって、自分の理想とする養護教諭像をイメージできたことが、意欲回復のきっかけになることが推察された。

## 3) 自分の課題への気づきと実習の限界

1日を通して保健室を見学することで、大学の学びと実践が統合され、養護教諭の職務の理解が深まったことに加え、自分の力量や適性と照らし、より自分の課題に気づくことができたと考えられる。また保健室への来室者数や健康問題は校種や季節、曜日によっても違いがあるため、指定された1日の見学では観察できる子どもの様子や養護教諭の活動には限界があること、〔養護教諭になりたい気持ちが低下した〕学生がいたことも明らかになった。見学実習により必要以上に自分を過小評価し不安が募る学生がいることも踏まえ、2年次以降の授業内容を工夫することに加え、意欲の推移とその影響要因を把握して

個別に対応していく必要もあるのではないかと推察される。またボランティア等の体験活動に継続的に参加させ、1日の見学実習ではできなかった経験を積み、理論と実践を往還することで知識と技術の獲得を実感できることが意欲の維持・向上につながる可能性があることと示唆される。さらに〔事前準備が足りず反省した〕という旨の学生の記述から、事前準備として質問事項を検討させるなどの指導が不足していたことが推察され、次年度以降の事前指導の内容を充実させる必要があることが考えられた。

## 結論

養護教諭志望学生初年次における保健室見学実習の有効性と課題について、実習事前・事後の評価表を分析した結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 観察を中心とした1日の保健室見学実習による学生の学びや気づきは【子ども理解】【養護教諭の職務と保健室の機能の理解】【大学での学びの深まり】【養護教諭の志向性と学習意欲の向上】【自分の課題への気づきと実習の限界】と多岐にわたっていた。
- 2) 1年間の専門的な学びが実習を通して具体化される。また適性や志向性に揺らぎを感じ始めた学生にとって、早期に保健室経営の様子や養護教諭の活動を観察することは、養護教諭になりたい意欲の喚起と学習への動機づけになる。
- 3) 1日の見学では観察できる子どもの様子や養護教諭の活動には限界がある。

## 引用文献

- 1) 大川尚子, 下村淳子, 青柳直子, 他. 養護教諭養成課程コアカリキュラム(養大協版)2020の開発-多様な学問体系の大学に活用できるコアカリキュラムの提案-. 学校保健研究, 2021, vol.63, p.91-101
- 2) 大谷尚子, 堀江宮子. 養護教諭指導学生の養護教諭志向に関する研究-養護教諭課程への志望動機と在学中の志向の変容について-. 茨城大学教育学部紀要(教育科学), 1985, vol.34, p.213-219
- 3) 今優佳, 工藤宜子. 教育学部養護教諭養成課程に在籍する学生の養護教諭志向に関する意識変容プロセス. 日本養護教諭教育学会, 2020, vol.24, no.1, p.43-50
- 4) 三尾真琴. 教職課程における学校インターンシップの意義と課題-学生支援員の活動を通して-. 帝京科学大学教職指導研究, 2016, vol.2, no.1, p.29-35
- 5) 佐久間浩美, 藤原昌太, 池谷嘉夫. 看護を基盤とした養護教諭養成機関における養護実践力育成の検討-教職インターンシップの取り組みの成果と課題-. 了徳寺大学研究紀要, 2018, vol.12, p.163-171
- 6) 文部科学省中央教育審議会. 学士課程教育の構築に向けて(答申), 2008
- 7) 堀内久美子, 下村淳子. 養護教諭養成課程1年生の授業に保健室見学をとり入れる試み. 日本養護教諭教育学会誌, 2002, vol.5, no.1, p.69-75
- 8) 玉田明子, 原祥子, 吉田由美. 授業「養護概説」の事前学習における学生の学び-保健室見学と養護教諭へのインタビューを導入して-. 鳥根大学医学部紀要, 2007, vol.30, p.43-50
- 9) 大谷尚子, 荻津真理子他. 大学における授業と臨地体験の統合化-養護実習生が「これだけは実習で学んだ」こと-. 聖母大学紀要, 2013, vol.10, p.63-71
- 10) 大谷尚子, 中桐佐智子. 改訂養護実習ハンドブック(第4版), 東山書房, 2020, p.21
- 11) 前掲書, 10), p.13